

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K11453

研究課題名（和文）被災した地域スポーツクラブにおけるレジリエンスの担い手のライフヒストリー分析

研究課題名（英文）A Study on the Factors which Promoted the Revival of Local Sport Clubs from the Devastation by the Great East Japan Earthquake Based on the Life History of the Bearer of the Resilience

研究代表者

吉田 毅（YOSHIDA, Takeshi）

中京大学・スポーツ科学部・教授

研究者番号：70210698

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：東日本大震災で被災した地域スポーツクラブの復興要因について各クラブのレジリエンスの担い手のライフヒストリーを基に分析した。対象は4つのサッカースポーツ少年団（以下、スポ少）、及び車いすマラソンクラブと社会人サッカークラブであった。スポ少の復興要因は担い手の子ども愛と、スポ少愛ないし指導意欲であった。子ども愛以外は人間関係に恵まれた担い手のスポ少経験や部活動経験によるものであった。他2つのクラブの復興要因は担い手のクラブに対する使命感であった。この使命感は、前者の場合は担い手の人間関係に恵まれたクラブ経験に、後者の場合は担い手と、クラブに思い入れを持つ指導者との親密な関係性に基づくものであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先行研究では被災した地域スポーツクラブの復興要因として、当該クラブのレジリエンスの担い手の心情（クラブ愛等）が見出されたが、それがなぜ生じたのかという点については検討されていなかった。本研究ではこの点について、担い手のライフヒストリーを基に検討し、新たな研究成果が得られた。それにあたり、クラブといった組織の復興要因の分析に、元来は個人的事象を捉えるライフヒストリー法を独創的に用いた。本研究の学術的意義は、こうした新規性、独創性にある。また、社会的意義としては主に、地域スポーツクラブではよき人間関係がレジリエンスの強化につながることを示唆する、実践的にも有効な知見が得られた点が挙げられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the factors which promoted the revival of six local sport clubs from the devastation by the Great East Japan Earthquake based on the life history of the bearer of the resilience. The factors of four junior soccer clubs were the loves for the members of each club and the club love or the willingness to coaching of each bearer. The club love and the willingness to coaching of each bearer were based on each junior soccer club experiences or each school soccer club experiences which were blessed with human relationships. The factors of the other two clubs were the senses of responsibility of the bearers. The bearer's sense of a wheelchair marathon club was based on his club experiences which were blessed with human relationships. The bearer's sense of an adult soccer club was based on his intimate relationship with the coach who had led the club with full commitment for a long time.

研究分野：スポーツ社会学

キーワード：東日本大震災 地域スポーツクラブ スポーツ少年団 障害者スポーツクラブ 復興要因 レジリエンスの担い手 ライフヒストリー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2011年3月11日に発生した東日本大震災(以下「3.11」)から8年あまりが過ぎた。各研究領域で3.11からの復興に関する研究が蓄積され、一定の成果が得られてよい時期であるが、スポーツ社会学において3.11に関する研究は低調であった。そうした中、筆者は3.11で被災した地域スポーツクラブ(以下「クラブ」)の復興要因について検討してきた。その結果、復興へ向かうクラブにはレジリエンス(回復力=復興力、抵抗力)の担い手というべきキーパーソンが認められたが、「担い手は苦境に立たされた被災地で、なぜ所属クラブのために尽力し得たのか、この点については社会的にどのように捉えられるのか」といった、復興要因の深層に関わる一歩踏み込んだ問いが残された。本研究はこうした問いに答えようとするものである。

2. 研究目的

本研究の目的は、3.11で被災したクラブの復興要因の深層について、レジリエンスの担い手(以下「担い手」)のライフヒストリー分析を通じて社会的視座から解明することである。まず、対象とするクラブの3.11以前の活動、ならびに被災と復興の概況について把握する。次に、担い手の半生を幅広く捉え得るライフヒストリーを基に、各々が所属クラブの復興のために尽力し得たのはなぜかについて分析する。その上で、有事にも挫けずクラブの持続に貢献し得るレジリエントな人材育成のあり方について考える。

3. 研究方法

本研究はフィールドワークの方法、特にインタビュー法を用いた。対象は、3.11で最も人的被害が大きかった宮城県の沿岸部を拠点とする被災したクラブ、各年度2つずつであった。当初は社会人の男子クラブと女子クラブ、障害者クラブ、それに可能な範囲でスポーツ少年団(以下「スポ少」)を対象とする計画であったが、研究期間の2年目(2020年度)に新型コロナ禍となり、調査を予定していた女子クラブが活動休止となった。しかも調査それ自体が困難となり、研究期間を1年延長するに至った。そうした中、新たに複数のスポ少の調査が可能となったため、まとまった成果をあげるべくスポ少に関する知見の蓄積をめざすこととした。最終的な対象は全てが男子クラブ、内訳は社会人クラブが1つ(2019年度)、障害者クラブが1つ(2021年度)、スポ少が4つ(2019・2020・2021~2022・2022年度)であった。まず、上記クラブの代表者及び関係者(いずれかは担い手)各々への複数回のインタビューにより、各クラブの3.11以前の活動、被災と復興の概況について把握するとともに担い手を特定した。その上で、担い手に対しライフヒストリーインタビューを重ねて行った。対象としたクラブと担い手を下記する。

<調査対象クラブと担い手> 身分等は3.11当時

- ・ A サッカースポーツ少年団(以下「A スポ少」): 拠点はY町
担い手: G氏(総監督、A町役場職員、1960年生まれ)
- ・ B サッカースポーツ少年団(以下「B スポ少」): 拠点はN町
担い手: H氏(監督、父親の会社勤務、1980年生まれ)
- ・ C サッカースポーツ少年団(以下「C スポ少」): 拠点はO市
担い手: I氏(監督、塾経営、1969年生まれ)
- ・ D サッカースポーツ少年団(以下「D スポ少」): 拠点はP市
担い手: J氏(監督、魚市場勤務、1985年生まれ)
- ・ E 車いすマラソンクラブ(以下「E クラブ」); 拠点はQ市
担い手: K氏(代表、無職、1968年生まれ)
- ・ F 社会人サッカークラブ(以下「F クラブ」): 拠点はY町
担い手: L氏(キャプテン、県漁業協同組合勤務、1981年生まれ)

4. 研究成果

本研究では、上述のような復興要因の深層に関わる一歩踏み込んだ問いに答え得る研究成果が得られた。以下でその概要を示す。まず、各クラブが3.11で被災するまでと、そこから復興へ向かうプロセスについて、次に担い手のライフヒストリー分析で得られた復興要因の深層についてである。それにあたり、各スポ少の復興要因には共通点が認められるため、はじめにスポ少に関する知見をまとめて示す。なお、レジリエントな人材育成のあり方については検討の途にあるためここでは割愛する。

(1) 各スポ少に関する概要

各スポ少の復興へのプロセス

< A スポ少 >

A スポ少は、県内のスポ少の草創期である1970年代初頭、Y町役場職員 氏によりY町の2つの小学校児童を対象に創設された。当初のメンバーは全学年にいたが、4年以上で30名ほどであった。指導者は監督 氏とコーチ数人であり、基本的に平日2日と土日に活動を行った。活動場所はS小学校であったが、1978年には完成した町営第1スポーツ広場(以下「第1広場」)に移した。創設翌年には早くも県大会で優勝し、全国大会出場を果たした。その後も着々と好成

績を残した。1986年にはV氏の要請で、全国大会出場時の中心選手であり、卒団後も強豪高校や地元クラブでサッカーに打ち込んだG氏がコーチに就任した。それ以降G氏は、実質上は監督として3.11までAスポ少の指導に精を出した。3.11当時、メンバーは卒団する6年を除き50人ほどであった。第1広場は仮設住宅用地となり、Aスポ少は活動場所を失った。メンバー数人は自宅が被害に遭い、祖父を亡くしたメンバーもいた。G氏は自宅ばかりか母も失った。業務の面では4月中旬まで避難所運営にあたり、役場等に寝泊りする日々を送った。「4月下旬頃までサッカーどころじゃなかった」という。コーチU氏も自宅と職場の被害が甚大であった。

活動再開は5月の連休明けであった。Aスポ少の担い手はG氏である。G氏は被災しても「このままクラブの火を消すことはできない...自分もここで育ててもらったし、いろんなことを学ぶことができた。伝統を絶やすことはできない」との思いが脳裏にあった。「公園で子どもがボールを蹴っているのを見ること」もあり「子どもに震災は関係ない、子どものためにもサッカーをやらせてあげたい」との思いに駆られた。だが、町内に活動場所はなかった。G氏は活動場所を探し、近隣の民間フットサルコートを手配した。移動にはAスポ少がレンタルするバスを使うことにし、大型の運転免許を持っているU氏に運転を頼んだ。メンバーも父兄も活動再開を待ち望んでいたという。まずは週末に上級生だけ再開した。間もなく隣のスポ少の配慮で合同練習の機会を得た。この際にG氏と下級生も参加した。1ヶ月ほどは週1、2回のペースで活動した。「子どもは生き活きしていた」とG氏はいう。初夏には第2広場が使用可能となったが、凹凸が激しく軟弱で水はけも悪かった。「練習にならなかった」とU氏はいう。G氏は関係者に呼びかけ整地に努め、仮設の照明灯も設置したが不自由は続いた。3.11から2年半あまり経つと、人工芝の町営フットサルコートが完成した。そこで活動する日は「子どものやる気が全然違った...でも70パーセント...真の復興は第1広場に戻れた時」とG氏はいう。

< Bスポ少 >

N町の社会人サッカークラブの仲間が2004年、沿岸部にスポ少がなかったため創設したのがBスポ少である。監督H氏とコーチ2人でスタートした。活動場所は地元のZ小学校であり、初年度はスクール形式であったが時折対外試合も行った。メンバーは幼稚園児から6年まで10人あまり、うち5・6年は2人ずつであった。2年目から正式にスポ少の登録をし、全日本予選をはじめ様々な大会に参加し始めた。活動は平日2日と土日であり、徐々に人数が増えるにつれ強くなっていったという。3.11当時のメンバーは6年を除いて20人ほど、うち5年が7人と多かった。3.11ではZ小学校も被災し、Bスポ少は活動を休止した。6年1人の母親が亡くなった。メンバーの自宅は大なり小なり被害に遭い、皆が暫くN町の避難所で過ごした。H氏は自宅も職場も失い、5月初旬まで家族5人（父母、妻、娘）で隣の姉宅に避難した。

活動再開は4月初旬と早かった。多くのメンバーが避難していたW小学校の真向かいに天然芝のサッカー場があったことが大きい。3月末になると被災を免れたYコーチから、Bスポ少のメンバーである甥が「身体を持って余っているから活動を」とのメールがH氏に届いた。H氏は再開の「きっかけ」を考えていた矢先で「有難かった」という。だが、4月初旬はまだ余裕がなかったため、再開時の指導はYコーチに委ねた。初回は週末で10人ほどのメンバーが参加した。1週間後の2回目からH氏が指導にあたった。5月の連休後は照明灯も使えるようになり平日の活動も再開した。この頃に20人ほどのメンバー全員が参加するようになり「復旧した」とH氏はいう。Bスポ少の担い手はH氏であった。H氏が復興に尽力したのは、「多くの財産を得た」という「サッカー」の素晴らしさを「子ども達の成長のために伝え続けたかった」とことによる。H氏はサッカーを通じて「頑張ること」と「出会い」の「大事さ」を学んだという。

< Cスポ少 >

O市を拠点とするCスポ少は1995年、沿岸部のR小学校サッカークラブを基に、その指導に長年に亘り携わっていたW氏によって創設された。活動場所はR小学校であった。創設翌年の初頭、監督W氏が50代で急死した（心筋梗塞）。後を継いだのが、前年の夏からコーチを務めていたI氏である。I氏は監督に就任すると同時にスポ少の登録をし、卒団生らコーチ3人と指導にあたった。活動は平日2日と土日であり、当初のメンバーは20人弱、うち6年は10人であった。2年目からメンバーが増え始め、試合で勝てるようになったという。2000年頃はメンバーが50人ほどとなり、平日は各学年が曜日別に2日ずつ活動する形となった。その後、メンバーは減少傾向となったが競技レベルは上がり、2003年から毎年のように地区予選を勝ち抜き県大会に出場した。2009・2010年は4年の県大会で8強に入った。3.11当時のメンバーは6年を除いて20人ほどであった。3.11ではR小学校も被災し、Cスポ少は活動を休止した。関係者に人的被害はなかったが、多くのメンバーとI氏は自宅を被災し避難所暮らしとなった。

活動再開は5月下旬であった。R小学校の周辺は被害が甚大であった。I氏は4月初旬、メンバーの様子を確認するため父兄をO市中心部に集めた。多くの家庭がサッカーどころではない状態だったが、I氏は「子ども達のため」にも「日常のサッカーを子ども達に戻したい」との思いに駆られた。全日本予選が6月初旬に開催されることが5月中旬に決まった。父兄に伝えると皆が「出場したい」と返答した。I氏は急いで活動場所を探した。市内の農業公園で活動できることになり、平日の夕方に全員が参加して活動を再開した。初回は軽い練習だったが「みんな楽しそうだった...よかった、ほっとした」とI氏はいう。当初より平日に週3回「頑張った」が、大会では初戦で敗退した。その後の活動は週1回に留まった。I氏は常時、自身の復興活動で多忙を極めたが指導を続けた。Cスポ少の活動が復旧したのは翌年春であった。Cスポ少の担い手はI氏であった。I氏が復興に尽力したのは、着々と成果があがってきたという、自身のサッカー

一経験を活かした「サッカーを通じた教育」を「子どものために」も続けたかったことによる。I氏にとって3.11以前、Cスポ少活動は貴重な活動であったという。

< Dスポ少 >

Dスポ少は2001年、メンバー不足のため前年に解散した近隣のSスポ少の団長を務めていたT氏によって創設された。Sスポ少の指導体制がそのままDスポ少に引き継がれ、T氏が団長、X氏が監督、T氏の弟がコーチを務めた。メンバーは20人ほどいたが、活動場所の問題で初年度の活動は週1回だけであった。翌年からD小学校の近くにある某企業のグラウンドを優先的に使用できることになり、平日2日と土日に活動を行うに至った。J氏は2006年、Sスポ少時代の恩師T氏に誘われコーチに就任した。当時はメンバーが増えて30人あまりいた。2007年にはX氏が監督を辞めたことでJ氏が監督となった。その後、Dスポ少は県大会に出場するレベルには達しなかったが、J氏は「弱くても子どもを大事に」して指導にあたった。メンバーは県大会出場をめざし「みんな積極的」に活動したという。3.11当時のメンバーは6年を除いて15人ほどであった。3.11では関係者に人的被害はなくグラウンドも問題なかったが、沿岸部に住む半分ほどのメンバーは自宅を被災し避難所暮らしとなった。Dスポ少は活動を休止した。

活動再開は4月中旬と早かった。グラウンドが無事だったことが大きい。T氏は3月下旬、親の会の役員に安否確認のため電話をすると、会長から子どもが活動したがついているとの情報を得た。再開を前向きに考えたT氏はJ氏に連絡した。J氏も子どもの意思を尊重すべきと再開に同意した。再開は週末であり、その際は全員が参加した。子どもの「声が響き、よかった、嬉しかった」とT氏はいう。活動は5月中旬まで日曜だけであったが、全日本予選の開催が決まった後は週3回に増やした。夏休みも同様に活動を続け、9月には「復興した」とJ氏はいう。Dスポ少の担い手はJ氏であった。J氏は「前から子どものためという思いは強かった...皆積極的だったし震災でだめになるのは嫌だった」。また「自分がサッカーで学んだことで、まだ子ども達に伝えていないことがあった。それを伝えたかった」。J氏が復興へ向けて尽力したのは、こうした自身の思いによる。

担い手のライフヒストリーからみた復興要因

上述のことから各スポ少の復興要因、換言すれば担い手が各スポ少の復興に尽力した要因として各自の心情、つまり「子ども愛」に加え、「スポ少愛」(Aスポ少)ないし「指導意欲」(B・C・Dスポ少)が挙げられる。次に、各自がこうした心情を持つに至った所以(深層)について、各々のライフヒストリーを基に得られた知見の概要を示す。

まず子ども愛は、ライフヒストリーに関わらず大人の普遍的な心情とみてよいだろう。他方、G氏のスポ少愛はいわばよきスポ少経験によるとみられる。G氏は小学5年時にAスポ少でサッカーを始めた。当初より競技力が優れており、間もなくサッカーにのめり込んだ。6年になるとV氏ら指導者に「特に目をかけてもらえ」て「いい思いができた」という。指導者は「お兄さんのようで温かく、ファミリー的」であり、G氏はこうした指導者に恵まれた中で「人とのつき合い方」「助け合う精神」「チームワークの重要性」等を「学んだ」。かくしてG氏はスポ少愛を持つようになり、卒団後も持ち続けた。コーチ就任後もそれを基に指導に精を出した。概ね以上がG氏のスポ少愛の所以であり、Aスポ少の復興要因の深層とみられる。

他3人が指導に携わるのは、G氏と異なり自身が所属していたスポ少ではない。スポ少愛が要因でなかったのは基本的にそのことによるだろうが、他3人もスポ少時代にサッカーが好きになり、卒団後もサッカーを部活動で継続する中で貴重なものを得たという。スポ少や部活動で「頑張ることの大事さ」(H氏、I氏)「頑張れば可能性が開けること」(J氏)を学んだ。また、H氏は高校期に「ずっと付き合える友人」を得た。I氏はスポ少・中学期に「見本となる」ような「温かく子どもの方をみている」コーチや先生と出会い、よい影響を受けた。J氏も中学期に「大らかで生徒の目線にたってくれる先生」に指導を受け、自身もサッカーの指導者になることを考えた。彼らの指導意欲の所以として、このように人間関係(仲間や指導者)に恵まれたよきスポ少経験や部活動経験が挙げられよう。

(2) Eクラブに関する概要

Eクラブの復興へのプロセス

Eクラブは1980年代後半、それまで主に車いすバスケットボールに励んでいた10人ほどのメンバー(数人は県外在住)によって結成された。基本的にQ市沿岸部の運動施設で土日や祝日にまとまって活動し、当初より全国各地で開催される大会に出場する者もいた。後に牽引者となるK氏が加入したのは24歳となった1992年、受傷した翌年であった。Eクラブはその後、メンバーの移動の問題のため内陸部の一般道で活動することもあった。また、メンバーの増減(転勤や家族、体調等の問題)や、駅伝参加をめぐる対立により分裂の危機もあったが、活動が途絶えることはなかった。2006年には、障害者スポーツに理解のある行政職員等の支持を得て、県を代表する車いすマラソン団体となった。初期からその代表を務めるのがK氏である。かくしてEクラブは組織的には安定化の方向へ向かったが、メンバーが増えることはなく3.11当時は6人で活動していた。3.11では上記の運動施設は壊滅し、一般道の多くも凹凸状態となりEクラブは活動場所を失った。メンバーがライフラインの問題で済んだのは幸いであった。

K氏は3.11直後から、自宅で時々筋トレを行った。4月末には「走りたい」という思いが強くなり、走行可能な道路を見つけて近くに住む1人のメンバーと走った。そうした中、Eクラブ代表という「まとめ役として、仲間のためにも...自分がやらないと」Eクラブを再開しなければ、

との思いに駆られた。K氏にとってはEクラブがあったからこそ、車いすマラソンという「やりがい」「生きる活力」を得ることができたのであり、「自分のような経験ができる環境を整え続けたい」とずっと思っていた。5月の連休明け、メンバーの安否と活動の意思をメールで確認すると、皆から「活動したい」との返答があった。K氏は活動可能な道路を探し、5月末に皆で活動を再開するに至った。Eクラブはその後、3.11前と変わらず活動を続けることができた。

担い手のライフヒストリーからみた復興要因

Eクラブの担い手はK氏である。K氏がEクラブの復興に尽力した要因は「クラブに対する使命感」とみられる。K氏は幼少期から運動が好きでも得意でもなかった。小学期は友人関係により野球遊びをよくやった。中学期は化学部で天体観測に励み、高校期は弓道部で心身が「鍛えられた」という。そうした中で仲間と争うことは一切なかった。「協調するタイプ」であり、もとより人のために「役に立とうとする気持ち」が強かった。高校卒業後は自衛隊に入隊し、その6年後に転落事故で受傷した。車いす生活となることを告知された直後は「これからの生活の不安が大きかった」。入院して2ヶ月後、テレビで初めて見た車いすマラソンに関心を持った。その半年後、「近くに日本のトップの選手がいる」ことを知った。「前向きになれて、自分もやりたいと思った」という。K氏の母親がその選手に手紙を送ると、すぐに当人が病室を訪れK氏に車いすマラソンを奨めた。間もなくK氏は実際に走ってみると「風を切ってる感じ」がして「嬉しかった」。徐々にスピードと距離をアップすることができ「自信」もついた。退院するやいなやEクラブに入った。K氏はその後、Eクラブで「技術の向上と記録更新」をめざし車いすマラソンに励むこと、また、仲間から「(障害者の)生活に役立つ情報」が得られることが「やりがい」「生きる活力」となった。こうした仲間に恵まれたよきクラブ経験が、K氏がEクラブの代表となった際に抱き、3.11の際は復興をおし進めた「クラブに対する使命感」の所以とみられる。

(3) Fクラブに関する概要

Fクラブの復興へのプロセス

Fクラブは1983年、Y町の2つの社会人サッカークラブが合併して発足した。地元スポ少出身であり、競技力等が最も優れたM氏がキャプテンを務めた。M氏は実質上監督も兼ね、その後長年に亘ってFクラブを牽引することになる。Fクラブは当初より競技志向型であり、Y町周辺の地域リーグ優勝をめざし、平日夜に数回と土日に町営グラウンドで練習に励んだ。結果として発足1年目に地域リーグで優勝し、その上のリーグ(以下「中位リーグ」)に昇格したが、中位リーグ2年目には活動に参加するメンバーが激減し、持続に関わる第一の危機に直面した。M氏は日頃からメンバー集めで「てんでこ舞い」となり、その状態は4年ほど続いた。M氏はこの間、恩師の要請でスポ少のコーチに就任した。ちょうどEクラブの戦力確保のために後進を「大事に育てなければ」と考えていたこともあり、スポ少をEクラブの育成組織に位置づけ、実際に子ども達を「大事に育てた」という。1991年には、3.11でFクラブの担い手となる小学4年のL氏がスポ少に入った。L氏は3年間、M氏に指導を受け多大な影響を受けた。

Fクラブは第一の危機を乗り越えた後、中位リーグで優勝し、その上のリーグ(以下「上位リーグ」)に昇格することもあったが、上位リーグに留まることは難しく中位リーグに留まる方が長かった。そうした中、M氏は総監督として後進の育成に努めたという。2002年、高校を卒業して3年目となるL氏がFクラブに加入した。2007年にはM氏の指名でL氏がキャプテンに就任した。L氏はその際、「大事に育ててもらえた」M氏への「恩返しとして、今度は自分がクラブに貢献しないと」と「責任」を強く感じた。

3.11では町営グラウンドが仮設住宅用地となり、Fクラブは活動場所を失った。L氏もM氏も津波で自宅が流された。M氏は「サッカーどころでなかった」という。L氏も暫く「サッカーのことは頭にあったけどそれどころではなかった」が、やがてメンバーと連携してFクラブの活動場所を手配し、4月下旬に活動再開を実現した。その後は「家庭と仕事のことで一杯一杯」であったが、Fクラブの「衰退はあってはならない」との思いで活動場所の手配やメンバー集めに努めた。自身が活動に参加できるようになってからは、Fクラブの将来についても考え「若手を育てることを重視」しながら復興へ向けて尽力した。Fクラブは3.11の翌年、中位リーグに参戦するに至った。活動場所の問題は残されたが、2013年秋に町営の人工芝フットサルコートが完成したことで解消された。L氏もM氏もこの時点でFクラブは「復興した」という。

担い手のライフヒストリーからみた復興要因

担い手のL氏は、M氏への「恩返し」の意をベースとする「クラブに対する使命感」を抱き続けたからこそ、Fクラブの復興に尽力し得たとみられる。ここでキーとなるのは恩返しの意である。その所以はどのように捉えられるであろうか。L氏はスポ少時代にM氏の指導に感心した。また、Fクラブに所属するM氏のプレーを間近でみて「憧れ」た。「凄い人」であるM氏からL氏は多大な影響を受けた。L氏がサッカー強豪高校に進んだ高校時代、M氏はL氏の試合を見に行くなど「親のよう」にL氏を見守った。それは卒業後も変わらなかった。かくして、L氏はM氏に「親心」を感じて強い「愛着」を覚えた。L氏にとってM氏は「親」のような「恩返し」の対象、換言すれば愛着を基礎とする親子のような親密な関係性を築く貴重な他者となった。こうしたM氏との関係性が、L氏におけるM氏への恩返しの意の所以といえよう。L氏はキャプテンに就任した際、それを基に上記のような使命感を抱き、この使命感が3.11の際にはFクラブの復興をおし進めたとみられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 吉田毅	4. 巻 29
2. 論文標題 東日本大震災で被災したスポーツ少年の復興プロセス 復興をおし進めた力とは	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 身体運動文化研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究課題で得られた研究成果をまとめた論文1編を学会誌に投稿中である。

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------